

# neji&co.



バラヤイカ 01

neji&co. では、インタビュー・対談を中心としたカンパニーマガジン「バラヤイカ」を不定期で発行します。第一回目は、neji&co. 主宰・ダンサー・振付家の振子びじんに、カンパニーメンバー（大谷悠、畑中良太、御厨亮）がインタビューを行いました。京都に住み始めてからのこと、カンパニーを結成した経緯、作品製作やコロナ期間中の過ごし方など、様々な話が繰り広げられました。

neji&co.

## interview

振子びじん（ダンサー・振付家・neji&co. 主宰）（N）

聞き手：大谷悠（O）、畑中良太（H）、御厨亮（M）

カンパニー

N 11月の公演に向けて、カンパニーを結成したついでということや、僕は京都に来て3年になるんだけど、頻繁に京都で作品を発表しているわけでもないから、自己紹介も含めて話をしたくて今日集まってもらいました。コロナ禍で皆それぞれ考えていることもあるだろうし、作品以外の話もできたらいい。みんなに質問してもらおうというやり方で話していこうと思います。

O カンパニーを作ろうと思ったきっかけは何ですか？

N まず、カンパニーって何だろう。会社？（笑）

N まあ、普通はそうだね。舞台芸術でカンパニーっていうとどんなのかな。

O カンパニーって、やりがい搾取みたいなところもあると思っていて。ギャラどうこうではなくて、むしろメンバーがそれぞれお金を出してでも公演をやるという契約を結ぶ意味合いが劇団やカンパニーには強いと思う。

N それでいいっていう人が全員集まっていればいいよね。そうじゃないこともあるけれど。

O ダンスカンパニーでいうと、身体性が揃っている。逆にいうと身体性を揃えたい演出家や振付家がカンパニーをつくって、同じ身体性を持った人たちをたくさん増やして自分の作品をつくるイメージ。そういうの、振子さんもあるんですか？

N 僕もそれをやりたかったんだけど、まあ、無理だよな。

O（笑）

N 結構早い段階でわかるよね。でもイメージしていたのはそういうカンパニー。一つのメソッドがあって、みんなそれをやっていて、体の使い方も同じような人が集まっている。それで主宰者の芸術を達成するためにメンバーが集まっている。自分が知っているカンパニーのモデルもそれだったし。だから、カンパニーをつくる、って言った時に、つく

るとはいったものの、カンパニーってちょっとダサイかも、っていうふうにも思ったよね。コレクティブとか、いろいろな集団の形が模索されているわけでしょ。今さらカンパニーかよ、っていう。でも、集まってみたら思っていたのと全然違う。みんなバラバラ。何笑ってんの？

H (笑) いや、めっちゃバラバラやなって。

N 自分が知っているモデルがあつて、それじゃないうっていうこともわかっているんだけど、始めてみたら気が付いたり調整したりして、集団の形が変わっていくこともよしとして、とりあえず、カンパニーを結成してみた。で、なぜカンパニーをつくらうと思ったかというと。僕は今まで20年間いろいろな仕事をしてきたけれど、展望がないんだよね。どういう風になりたいとか、どういう作品をつくっていくか、そういうのがない。だから、いろいろやってみて残りの人生も意識するようになったから、展望が欲しいなと思った。時間と経験を積み上げていくようなことをしたいと思ったんだよね。それがカンパニーをつくらう、と思ったきっかけかな。なぜならそれは1人ではできないから。1人だとまたいろいろな仕事を時間を通じてしまっただろうと思うから。だから自分に対する振付でもあるんだよね、カンパニー自体が。展望を得るための振付。

カンパニーメンバー

O さっき身体性を揃えるっていうことにカンパニーのイメージがあつたっていう話をしたけれど、振りさんの選択肢としてそういうことをしやすいうダンサーを揃えることもできたわけですよ。でもそれが出来ない(笑)、その可能性が見えにくい4人になってしまったのは何故ですか？

N そこは、やっぱり展望がないんだよね。全員(笑)

N 大谷さんはちょっと怖いところがあるし、この

いつというプレッシャーが自分たちにかからない程度に観客を入れようかなとは考えている。最初は無観客かなとも思っていたけれど。だから撮影したものを有料で配信するとかは考えている。

H 人がいた方が踊りやすいですね。人がいないと、物質と対話しなければいけないような感じがあつて。

N 考え中。こうなったら面白いよね、っていうのはあるけれど、実際予算との兼ね合いでチケット収入がこれぐらい必要っていうのはあるから。この状況がどうなるかわからないし。今我々はこうして話しているけれど、誰か一人でも感染者が出たら公演自体ができないわけだし。僕が感染するかもしれないし。

稽古場

N 稽古場ではまず話しますね。最近何してる？何食べた？とか、何観た？とか。

O 前の稽古から2日しか経ってないのに、この2日間どうしてた？とか聞いてくる(笑)。

N そうね。稽古の最初に僕がそう喋るね。

O ウォームアップ(笑)。

M それってすごい大事なことだなと思いますね。日々の生活の中で2、3日しか経ってないけれど、心の機微みたいなものってあると思っていて。それをサラッと話しながら、じゃあストレッチャりやりますかっていうスタンスって、意外と劇団やカンパニーでは難しいと思っていて。それこそ、本格的に目標があつたり、やりたい作品があつたりするとその時間が無駄なんですよ。だからそこに入れないんですよ。時間のロスに感じちゃう。今コロナの状況でそれをやった方が、もっと自分たちのやり方として間合いが出来てくるというか。僕はそれこそカンパニーも劇団も所属していたので、ちょっと振りカンパニーに対する見方が変わったというか、全然雰囲気が違うという感じでしたね。

N 何か目標があつて、みんな同じものを見ていて、

人どうなっちゃうんだろう、みたいな。触っちゃいけない部分があるというか。あと、ダンサー然としていて、テクニク的な部分でカンパニーに還元してくれそうだな、という僕なりの思惑はあつた。あとはまあ、ダンサーズ(1)に参加していたり、京都に来て最初の方に知り合つて、普段ご飯食べたりに面白い人だと思つていたので。畑中さんは、アトリエ劇研(2)でやっていた山下残(3)さんの穴の作品(4)を見て気になつてた。当時残さんに聞いたら学生だつていうから、学生は嫌だから卒業したら声をかけようと思つてた。御厨さんは、カンパニーメンバーを公募した時に応募してきたんだよね、1名だけ。

O 1名限定でしたっけ？

N うん。1名限定、ダンサー、学生不可にしたんだよね。で、興味ある人、継続してクリエーションに関わる人を募集したら、応募してきたのが御厨さん1人だけだつた。僕は誰が来てもメンバーになつてもらおうと思つてた。でも、あまり変な人が来ても困るから、宣伝もしなかったし、ツイッターだけで告知した。ハードルもそこそこ高く見えるようにした。ダンサーであること、とか、1名、とか。その時点で、これは難しそうだな、と思う人は出さないでしょ。そしたら応募してきたのが御厨さんだけだつた。

O もし3名応募があつたら3名とも採るつもりだつたんですか？

N うん。1名つて書いていたけれど、3名でも4名でも。でも御厨さんだけ。

O 4人にしたいんだと思つた。

N 全然。ただ10人だと多いなと思つてた。でも7人くらいだつたら別にいいかな。だから3、4人だつたら、いいですよやりましょう、っていうつもりだつた。やつてみて嫌になつたらいつ辞めてもいいですよ、っていう。違うなと思つたら公演出ませんとか全然ありなわけですよ。それでこのメンバーになりました。御厨さんはなんで応募してきた

そこに向かつて進んでいくっていうのがやりたいんだだけと出来ていない、っていうだけなんだよね。全員(笑)

N フワッと結びつけていく、ドラドラと。目的がないんだよね。でも作品があるからね。まだ断片しかできていないけれど。出来上がったらみんなで見据えなきゃいけないものになるっていうか、現時点で時間かけなきゃいけないものだつていうのは分かるじゃない。公演の内容が固まってくると勝手にそうなるのかなと思つている。



京都

N 京都でダンスをやるってどうですか？

H あんま他で踊つたことないから、ずっと住んでるから京都の特別さというか、オリジナリティがちょっと分からないんですよ。これが僕の中の標準という感じで。

O 畑中さんは東京に行つてみたいとか、京都以外

の？それと、なんで御厨さんしか来なかつたんだろう？

M (笑) 前者に関しては、ちょうど振りさんが東京から京都に移ってきたタイミングと、僕が京都から東京に行ったタイミングが重なつていて、すれ違ひだつたんですよ。それで僕が東京で別のカンパニーに参加して、そして東京から京都に戻ってきたタイミングで、そういうえば振りさんと確か京都にいたんだよね、どんな活動しているんだろう？って調べたら、ダンサーズやつてるみたい。その時に振りさんのダンサーズメンバー募集の言葉で、僕がワツ！つてなつたのがあつて、「生活にダンスの杭を打つことを目的とします」っていう。これ僕にとつてはたまになくて。

N たまにないでしょ。僕もたまにないもん。

M (笑) この一言に感動的にビビッときて、自分がダンスをしたいとかダンサーであるとか以前に生活にダンスの杭を打つて、根元的に自分はそういうことをしたいと思つていたけれど、何となくクリエーションで紛れてしまつて難しいと思うことがあつて。だからその言葉に当てられたっていうのはあります。ダンサーとして自分は体が効くわけでもないし、経歴でいうとダンサーっぽいこともやってきたけれど、とりあえずダンサーズに参加して様子を見ようっていうのはありました。パフォーマンスとか演劇っぽいことをやつてきたけれど、ダンスと向き合う時間をこのタイミングでつくつていいかなと思つて。

N 作品をつくるということ一つとつても、無理をする、っていう感覚があるんだよね。現実に無理させるとか、自分に無理させるとか。僕は日常生活にダンスが根付いているわけでもないし、そんな中で踊るっていうのは無理をすることなんだよね。その無理をしたという欲望があつて、踊らずにはいられないっていう感覚が僕には全然ないんだけど、無理を欲しているっていう感覚が踊りを欲している感覚に近いんですよ。無理をするっていうことを手

に行つてみたいっていうのはあるんですか？

H あんまり行きたいとは思わないですね。東京は一時期通つてたこともあるんですけど、苦手でですね。めっちゃ人多いし、めっちゃ建物立つてるし。入り乱れてるし。そういう中で踊つたりすることを想像できなくて。東京行くんやつたら、どつか海外に行きたいです。

N 僕は東京に18年間住んでたんですよ。18年間秋田。18年間東京。で、京都3年か。東京好きでしたけれどね、いろいろ文句は言つてたけれど。今はもう住めない。でも、人が人を気にしていない感じが居心地良かったです。東京つて言つても広いんですよ。僕は池袋近隣に住んでいたけれど好きだったね。京都に来て思つたのは、やっぱり、人のスピードは緩やかだよ。あと、人は多いけれど、観光客がほとんどだからみんな楽しそうだし。日本語だけじゃなくて、いろんな国の言葉が聞こえてくる感じが心地いいですね。今観光客とこまないけれど、そういう意味で東京に比べるとストレスが少いかな、っていうのが京都の印象。僕はまだどこか観光客目線で街を見ている、いまだに。高校の修学旅行で京都に来ているけれど、京都に住んでいるっていうことが不思議に思えることがある。街を自転車で乗っているだけでウキウキした気分になることがある。完全に日常にならないところがある。最初は、困つたな、とも思つたんだよね。ストレスがないから、作品のことを考えないですむ。東京ではストレスが自分を刺激していたんだよね。ストレスつて刺

激だから。だから自分が怒つてたりイライラしたりすることによって、自分のクリエイティブな部分が発つてたんだけど、京都に来たらはんなり？作品のことを考えなくてもいいかな、家でカレーでも作つていれいいや、つてところがあつた。最近までは、M すつごい分かる。

N ただそういうわけにもいかないじゃない。暇になれば何かやりたくなるでしょ。ここ1年半ぐらい前からまた何かやろうかなくて気分になつてる。

放したくないと思つている。手放してたまるものか、っていう気分がある。だから「杭を打つ」っていう言葉は、なんとしても自分は踊るんだ！っていう意気込みを言葉で表したんだろうね。自分で書いて自分でシビれましたよ。

M やつぱ舞踏の人の言葉だな、と思ひましたね。N そうだね。僕は自分のことを舞踏の人だとは言わないけれど、否定もしません。で、後者は？

M それは振りさん本人も言つてましたけれど、そもそも告知がないじゃないですか(笑)。

N よく吸き当てたね。ツイッターなんて、僕そん

なにフオロワーもないのに。

M 僕はだから気になつてたんですよ。ダンサーズやつてますみたいな。東京にいながら、面白そうだな、と思つてチラチラ見ていたんですよ。京都のダンサーでどういう人が参加しているんだろうとか。

N コロナで中止になつてきているけれど、2年続いたね、無理しない感じが。無理するつてさつき言つたけれど(笑)。

新作公演

N 今作品の稽古もしているけれど、どうですか。

H どうなっちゃうのかな、つて感じですね。この方向性で行つた先にどういう風になるんかなつていうか。楽しさがすごいあつて、ちょっと不安もあ

つつつていうか。

N 不安はありませんよ。僕も普通のダンスをつ

くつているんじゃないかってちょっと不安になる。

O タイトルは未定(5)？

N タイトルは未定。勝手にやつてきた時につける。本番までなくてもいいし、本番が終わつてからつけ

てもいいかな。自主公演だし。いつも依頼仕事だつ

たら最初にタイトル決めなきゃいけないやつたりす

けれど。

O 観客を入れるか入れないかも未定？

N 観客は入れたいけれど、今の状況で満員にする

のは無理だね。だから集客を頑張らなきゃいけな

い

今は便利な場所に住んでいるし、気楽に京都いい

わ！つて言つてます。

カンパニー名

O カンパニー名がついてるじゃないですか。

N はい。"nejiko"で「ねじこ」と読む人もい

ます。梅田哲也(6)くんは「劇団ねじびん」の

新作をつくると言つています。

O "nejiko"はどう思い付いたんですか。

N 最初に声をかけたのが大谷さんだったから、

カッコいいカンパニー名を2人で考えようつていう

のを話しましたね。そしたら大谷さんが考えてくれ

たのがいくつかありました。「立ち食い」とか。他

に何があつたけ？

O 振りさんから、動詞を入れたいとか、動いてい

る感じっていうのがあつて。それでいくつか出した

んだけど全部却下されたね(笑)。「立ち食い」「ゴ

リ押ししたんだけどなあ。

H 「立ち食い」は却下されますね。

O えー、ほんとに？だめかな。

N 他には「ですから」、「コピペ」、「ぼな」と

か。あと動詞で「最後に残す」とか、「めどつけない」とか。ていうのをだしてもらつて、ありがどう！

"nejiko"にします、みたいな。

O (笑)

N オールソックス、無難も無難。なぜこれになつ

N ありがたい、大谷さんじゃないんだ、ついでのがわかった。

O その時に振子さんが言っていたのは、自分の名前の特殊性に勝てないとか。

N そうね。だからややこしい名前のカンパニー名があって、振付が「振子びじん」なんてうるさ過ぎるって思った。それもあるんだよね。「Jiji」なんてカンパニー名に入れるのは嫌だったんだけど、捻ったものもややこしいな、とも思ったはず。

H ニュートラルな響きが今カンパニーがやるうとして、いることとマッチしていると思いましたがね。

### 展望

O これからの展望っていうのはあるんですか？

N 今年公演があって、きつと終わった時にやりたいうことがあろうと思うんだけど、僕が今やりたいのはテキスト。文章を書く。稽古して、稽古から出てきたものを言葉にする、っていうのをひたすらやりたい。公演はないけれど稽古はするんだろうね。公演は分からなくない？この状況がどうなるんだろう。ただ別に困らないんだけどね、公演が一番の目的ではないから。舞台芸術って自分にとって特別なものだけ。

M それって京都にいろからこそ出来ることなのかな。東京のスピード感で物事を考えたり、周りの人と話したりすると、焦燥感や切迫感を突かれるような気がして、それは多分京都の方が、そうじゃなくいられるっていうことはあると思います。

N 分かる。今御厨さんが言ったことの最大の原因は、東京はとにかく観るものが山のようにあるんだよね。舞台芸術にかかわらず。それに刺激を受け続けるんだよね。ストレスだけじゃなく。僕は、めっちゃ観客なんです。よく劇場で見かけるって言われるんだけど、作り手の中ではよく舞台を観に行っている方だと思ってる。単に作り手として他の人が何をやっているのか気になるっていうのはあるし、どんなことやっているのか観に行ってるっていう

意地悪な気分もあるけれど、もつと観客として舞台芸術を必要としているところがあるんだよね。だから信じているところがあって、舞台を観ることが自分自身に変革をもたらしてくれることを。何か観にいった自分自身が変わってしまうような経験を本気で求めているようなところがある。純粋な観客の部分が自分にある。

O 京都って東京に比べると公演が少ないです。だから考える時間があった。刺激を受けずにすんだから。まあ何が悪いとか悪いとかないから。そこにいたらそういう風になるってだけだから。



M 自分の作品を観客に見せるというのは、何を求めているんですか？

N 前に大谷さんと、踊るってことについて話していたんだけど、自分が踊ることによって得られる感覚で十分満足できるっていうのはあるじゃない。

N 苦勞はいつもするけれど。自発的っていうのはちよつと苦しいことかもね。うまく行っている時って自発的ではないんだよね、やっていると巻き込まれているから。自分がやっていると感じがないんだよ。後から思い起こして、何であんなことしてたんだろ、よくやってたなっていう。そういう時が面白い。同じく巻き込まれていた人たちで後から笑えると、よりいいね。だから自発的に何かやっていると一番苦しいかもね。何かする理由が自分にかないってっていうのは嫌だね。やりたいからやるとか。

M やらなきゃいけないからやる、っていうのが苦しいわけではないんです。

N うん。僕スケジュールとto doリストが好きなんだよ。ある期間があって、いつまでにこれを仕上げて、ここまでにこれを終わらせてって、自分で書いてそれをこなすことに喜びを感じる。公演もそうやって本番を迎えるのが好きなんだよ。そうやってると面白い。

O めつちや展望あるじゃないですか。

N スケジュールの時間を展望と呼ぶにはちよつとスパンが短すぎるね。

### 振付

M 振子さんが振付をする動機ってなんですか？

N 振付って何？ってことから話さないといけません。さつき共犯関係っていう言葉を使っただけで、振付と振り付けられる側が共犯関係を結ぶという感覚がある。ルールに従うのでもなく、仕掛けに動かされてしまうのでもなく、振付って、どう振る舞うかが受け手に委ねられているところがあると思う。今、振付っていう言葉をダンスに限らない意味で話しているんだけど、いわゆるダンスの振付っていうことで言うと、例えばその振付で踊っていると楽しくなってくるようなものもあれば、そうじゃないものもあるじゃない。振付が難しいとか、動いていられないけど、何も自分に起こらないとか、動いて

僕もそうなんだよ。

O 話しましたね。

N そう。でも僕はどっかで、何か影響を与えたいと思ってるんですよ。だからアウトプットする。革命を起こしたいとか、世界を変えたいとか、そんな大きな言葉は僕からは出てこないけれど、何か自分の仕事で影響を与えたいと思ってる、もしくは、自分と共犯関係を築いてくれる人を探しているというかな。そうね、共犯関係っていう言葉がいちばん近いかな。だから1人では満足できないんだよね。共犯関係、それを求めている。

M コロナになって、アウトプットする環境自体が難しくなっている。お客さんが来てくれるかどうかも分からないし、劇場で出来るかどうかも分からない。しかも、タイミング的に今カンパニーを立ち上げたばかり。でもコロナ後のクリエイションをしている中では、あまり振子さんから悲観的な印象を受けないんですが、それはどうしてですか？

N まあ、本番が11月だったっていうのはあるけれど。もし今公演があったら泣いてるかもしれないし。まあ、なんか考えなきゃいけないっていう意味では困ってるって言えるのかな。でも、僕は全くやる気がないわけ。このコロナの状況に回答して、アーティストとして果たすべき役割を全く感じない。なのやる気もない。でも、今までやれてきたことを対策を施すことでなんとか通す、ってことじゃなく、違うやり方を発明しなくてはいけないんだよね。居酒屋で全員がマスクしてフェースシールドして、っていうのは違う気がする。それは前のシチュエーションを維持しようとしているわけですよ。

O 無理している。

N そう。そうか、無理するのも面白いね。客席を満員にするために対策を考えなきゃいけないっていうのは、それはそれで面白いね。だからコロナ前と同じ状況を成立させるために無理するっていうのは、今想像したら楽しかったからそれはそれでいいかも。でも僕らはそれじゃなくって、違うやり方を

いるだけで嫌な気分になってくるのか。どんな振付でもダンサーはそれを何とかしなきゃいけないわけですよ。前にやったゴダール「はなればなれ」の振付(8)は、僕なんかは踊り出すとノックして楽しくなっちゃう。でもそれだけじゃなくて、その振付との距離を調整するような感じもあって、踊るんじやなくてただ動いているのと変わらないような淡白な質感を出すことも出来る。その振付との距離を調整するような感覚は、踊っていて楽しいっていうのはまた違う快楽なんだよね。それも振付との共犯関係を言うことができると思う。振付があつて、それをどう踊るかはその手に委ねられている。



N 梅田哲也くんの話をするんだけど。前に福岡市美術館で梅田くんの個展(9)があつて、そのパフォーマンスに参加したのね。一見何も無いがらんとした部屋に観客が集められる時間があったんだけど、その部屋で梅田くんと何かやろうってことに

考えなきゃいけない。コロナ後っていう言葉があるけれど、僕はコロナ後っていうのは今じゃなくって、もつと後に来ると思っている。これは「無理」っていう言葉をネガティブな意味で使うけれど、いま何が無くなっているわけじゃない。人が集まることとか、日常生活で当たり前をやっていたことができなとか、外に出るにもマスクが必要とか。何らかの機会が失われている気がする。そのことの無理が、どこかで噴出するんじゃないかと恐れている。いろいろな形で。その噴出した無理になんらかの形で対応しなくてはいけないなるだろうと思ってる。それがコロナ後の世界なんじゃないかな。その時には、僕らは僕らで出来ることを考えなくてはいけないかもしれない。だって何にもないはずじゃないよ。生活が変わりました、なんて無事で済むはずがない。失われたものは取り戻さなければならぬから。それが良くない形で出るんじゃないかと思ってる。ただ、コロナの今はアーティストとして何かやる気は全く起こらない。

M 1年目、2年目と、活動の仕方は変わっていくんでしょね。

N あと、今回E9(7)で公演させてもらうけれど、劇場を使わないっていうわけにはいかないだろうね。自分が京都に住んでいて、あそこに劇場があるっていう生活が自分に関わっているから、もう劇場で公演しませんが、そういう風にはならないだろうね。劇場も込みで自分の生活をいい感じにしなきゃいけないので。何か考えなきゃいけないってことを心に留めてる。

### 製作期間

H 週に何回か4人で集まってますけど、カンパニーをつくるってから変化したことはあるんですか？

N あるよ。うん。みんなのことを考えてるよ、いつも。

O (笑)なんか担任の先生みただい！

N 僕らで何が出来るのかを考えてる。僕、日常生活になって、まず部屋の中に僕が入っていった。すると観客は僕を見るよね。それでしばらくすると、梅田くんがその部屋にぎくろを一個置いたんだよ。すると、僕はそのぎくろに対して自分がどう振る舞おうか、ぎくろを使って何をしようかっていうモードになったんだよね。観客が見ているっていうことも関係している。自分の体がぎくろをどう使うのか、自分の体をぎくろに対してどう配置するのか、ぎくろがどう自分の体を使うのか。つまり、ぎくろ自体が僕に対する振付になっているんだよね。でも、僕はぎくろを無視してもいいわけだよ。だからぎくろとの共犯関係を築くかどうか、つまり、ぎくろを振付として受け取るかどうかは、受け取り手である僕に委ねられている。そこがルールに従うことや、仕掛けに動かされてしまうことと大きく違うところだと思ってる。それでどうしたかっていうと、僕はぎくろを部屋の真ん中に置いて部屋を出て行ったんだよ。そうすると、残された観客がぎくろの周りに集まってきて、ぎくろを見てるんだよね。ぎくろが置いてあることを確認しただけで部屋を出る人もいるよね。でも、もしかしたらぎくろから何かを受け取ってしまう人もいるかもしれない。そしたら今度はぎくろが観客に対する振付になる。それでしばらくして、次に部屋に入った時にどうなっていたかというところ、そのぎくろは無くなっていました。誰かが持つて帰っちゃったんだろうね。で、ようやく質問に答えるんだけど、なんだっけ？

M 振子さんが僕らに振付をする時に、その振付の根拠になるものは何ですか？

N それはその人の体でしかないかな。その人の体と、その人の動き。今はね。その人の体と自分の体の差つてこともあるのかな。他人の体を見ながら自分の体を見ているようなところもあるね。だからそれって大変なんだよ、その場にみないといけません。スコアでも書いて渡せばいいんだけど、今はそうやっていないね。そういうものも試してみようか。

○ 振子さんにとって作品とは？

N 作品とは！？

○ ぎっくりですけれど。観る側としてでも、つくる側としてでも。

N つくったものがあって、つくった人がいるっていう関係にかかわる考え方かな。作者がいないものを作品とは言わないよね。ただ、僕は作り手が作品として提示しようとする意図が介在していないものを作品とは言わないと思っていて、アリの巣はアリの作品じゃないし、ホテルの光はホテルの作品じゃない。でも、何でも作品として考えることはできるのかな。例えば、ここにコンビニのアイスコーヒーがあるけれど、このコーヒーはコンビニの作品と言えるのかな。プラスチックカップは工場で作られたものだけれど、製造工程に関わった人がいるとして、その人の作品と言えなくもない。コーヒ豆は生産者がいるから、まあ、作品なのかな。じゃあ、作品と呼べないものって何だろう？

○ 空気が？

H 空気は植物の作品じゃないですか。

○ あー、ほんまや！

N 海だって地球の作品とか？地球だって宇宙の作品と言えるのかな。キリがないね。で、神様が出てくるんだ。神様は人間の作品だね。出どころが欲しいっていうことなのかな。

M 作品と呼ぶって、めっちゃエゴイステックですわね。

N そうか、そういう意味ではそれが作品か作品ではないかっていうのは、作り手には関わりがないってことだね。作り手が作品だとは思っていないけれど、作品として提示されているものも世の中にはたくさんあるね。アウトサイダーアートとか。ぎっくりだけれど。じゃあ、作り手がいないもの、出どころがないものって何だろう。

○ 出どころがないもの？

N 作品について思いついたことがあって、僕は今京都市のゴミ収集の仕事をしているんだけどね、

ゴミ収集車の後ろについて走りながら、集積所に置かれたゴミの袋を回収していく仕事ね。収集車にゴミ袋を投げ込んでボタンを押すと、回転パネルがまわってゴミを荷箱に押し込んでいくんだけど、その時に袋がパネルに挟まれて、破けると中身が出るんだよね。生ゴミとか、まあ色々汚いものが荷箱の入り口に散らばるわけ。で、その中に雑誌のグラビアが紛れていた時があって、その時にへばりついたゴミやいろんな汚れと、グラビアが混ざり合った様子がすごく良かったんだよね。でもパネルがもう一回転してすぐ消えちゃうから、それが現れたのはほんの数秒。すごくロマンチックな話になっちゃうんだけれど、どこから来たのかもわからないし、誰にも届かずに現れて消えていくようなものに物凄く惹かれるところはある。人間が生まれて死ぬことの無意味さみたいなものを感じさせてくれるものが、自分にとって重要。作品もこうあって欲しい、っていうとそんな風にはつくれないし、そんなの狙って作品つくるなんて寒いから、あくまでロマンだけれど、どこか作品をつくる時の理念として持つてる考えかも。

○ 人間て人間から出てくるじゃないですか。でも赤ん坊は母親の作品ではないし、出どころが分からないっていう話をしたけれど、なんか、生まれてしまったもの、っていうのは作品という考え方からは遠い気がする。

N 生まれてしまったものを作品と呼び難いっていうのはわかる。僕の世界に神様はいないので、どんなものも神様がつくったものではないわけ。赤ちゃんも父親と母親がいて、だから論理的に子供を親の作品とは呼べないけれど、そういう風に考えることもできるのかな、うーん、でも、生まれるってことに関しては誰も関われないじゃない。出産に立ち会う人や、手助けをする仕事はあるよ、でも生まれるって、どうしようもなくない？

○ たしかに人間にはどうこう出来ない瞬間ってあるじゃないですか。でもそこに介入したいっていう欲望も人間にはあると思うんですよ。

N そうか、介入しているだけだね。何も生み出していない。そう考えると、あらゆるものは生まれてしまったもので出来てるね、舞台芸術だって。作品を見るっていったって、目の前で起こっていることにいちいち立ち会っているんだからね。それは舞台芸術にかぎらない。

○ なるほどー、ぎゃっ！鼻血だ。滅多に出ないんだけど…。

N 出ちゃった、っていう意味では今話している作品の話に関係しているね。ちよつと止めようか。



【予告】バラヤイカ02

対談 きたまり×振子びじん 10月中旬発行予定

(2020年7月27日収録 Space bubu)

\*1 ダンサーズ

2018年より週1〜2回のペースで定期的開催されているダンスの練習会。ダンサー、俳優の他、舞台未経験者も含む様々な参加者により構成される。2020年3月よりコロナウイルス感染症対策により活動を休止している。

\*2 アトリエ劇研

京都市の左京区下鴨に存在した民間の小劇場。館長である波多野茂彌（はたのしげや）の自宅を改装し1984年に「アトリススペース無門館」としてオープン。1995年に「アトリエ劇研」へ改称。館主の高齢化などの事情で、2017年8月31日をもって閉館した。

\*3 山下残

振付家・演出家。代表作に、100ページの本を配り観客がページをめくりながら本と舞台を交互に見る『そこに書いてある』、スクリーンに映写される呼吸の記号と俳句のテキストを身体とあわせて見る『せきをもとひとり』、線路の上を歩きながら世界の事象をつぶやく『大行進』。近年は国内外での局地的なリサーチワークも多数手掛け、バリ島に滞在して創作した『悪霊への道』、京都の老舗劇場閉館に捧げる『無門館の水は二度流せ 詰まらぬ』、マレーシアの政権交代を、立候補した友人と共にドキュメント&再現した『GE14』などがある。

\*4 穴の作品

山下残 振付・演出「無門館の水は二度流せ 詰まらぬ」(2017年8月アトリエ劇研)

\*5 タイトル

作品タイトルは『Sign』に決まる。

\*6 梅田哲也

大阪在住のアーティスト、音響作家、演奏家。ライブ形式の作品を発表する一方、インスタレーション展示も行う。ライブハウス、クラブ、野外倉庫、ギャラリー、美術館など様々な場所で作品を発表しており、水や石、電球、扇風機、ラジオなど、身の回りのものを素材とした動きのある彫刻作品や、環境、建築、人々のふるまいなどを素材に、その場所でのみ成立する体験をもたらすインスタレーション作品を制作。また、合唱など現地の人々を巻き込んで展開するパフォーマンスや、劇場の機能にフォーカスした舞台作品、自作の楽器を用いたほかのミュージシャンとのコラボレーションも行う。nejico.は11月の公演で、カンパニーレパトリーの製作を依頼している。

\*7 E9

京都駅近く東九条エリアに位置する、劇場THEATRE E9 KYOTO。もとは倉庫だったところを、客席数およそ100のブラックボックスとして2019年に開館した。

\*8 「はなればなれに」の振付

映画「はなればなれに」(1964年製作・公開、監督ジャン＝リュック・ゴダール)に登場するカフェのダンスシーン。音楽はミシェル・ルグラン。

\*9 梅田くんの個展

福岡市美術館で開催された梅田哲也個展「うたの起源」(2019年11月2日〜2020年1月13日)。会期中、ギャラリーツアーが開催され、ハイネ・アヴダル、篠崎由紀子、振子びじん等が出演した。

### nejico. (ねじあんどこー)

ダンサー・振付家、振子びじんが主宰するカンパニー。未来への展望を得るための振付として設立され、2020年より京都を拠点に活動する。2020年度 THEATRE E9 KYOTO スタートアップ支援。

#### 振子びじん (ねじ・びじん)

ダンサー・振付家・nejico. 主宰。2004年まで大駱駝艦に所属し、磨赤兒に師事する。舞踏で培われた身体を元に、自身の体に微視的なアプローチをしたソロダンスや、ダンサーの体を物質的に扱った振付作品を発表する。2017年より京都在住。生活にダンスの杭を打つべく“ダンサーズ”を主催し、定期稽古を継続する。2011年、横浜ダンスコレクション EX 審査員賞、フェスティバル/トーキョー公募プログラム F/T アワード受賞。2016年、Our Masters 土方巽「異言 /glossolalia」キュレーター。2021～2023年度 THEATRE E9 KYOTO アソシエイトアーティスト。

#### 大谷悠 (おおたに・はる)

モダンダンス、クラシックバレエ、ジャズ、タップなどのジャンルや教室を渡りながら幼少より踊る。拠点を京都へ移すとともに寺田みさこに師事。近年では、トリシャ・ブラウンに触発されたオリジナル振付作品を発表する。桜美林大学卒業、京都造形芸術大学大学院修士課程修了。精神科デイケアおいけにてダンスプログラム担当講師。京都市の青少年育成事業『ダンススタディーズ 1』ナビゲーター。Space bubu 管理人。東京生まれ育ち、京都在住。

#### 畑中良太 (はたなか・りょうた)

1996年京都生まれ。旧・京都造形芸術大学 舞台芸術学科卒業。舞踏への興味がきっかけで、在学中にダンスを始める。在学中は主に寺田みさこ、ヤザキタケシ、山下残、余越保子らにダンスを学びながら、身体作りのために太極拳を習う。カイテイ舎、デツ禎稀、山下残等の作品に出演。

#### 御厨亮 (みくりや・りょう)

1986年東京都出身。俳優。伊藤キムに師事。あごうさとし、きたまり、倉田翠、杉原邦生、dracom、山下残等の作品に出演。現代美術作家との協働も多く、雨宮庸介、梅田哲也、田村友一郎、Nadegata Instant Party等の作品にパフォーマンスとして出演。KYOTOEXPERIMENT、TPAM、Dance New Air、Nippon Performance Night (デュッセルドルフ)などの企画にも出演している。また、2013年から3年間、Dance Fanfare Kyotoの運営に携わった。

#### 「バラヤイカ」

バラは香りと棘がありまして

イカはつるつるとしてまして

ばらばらしてたり

つるつる泳いだり

そうしたものがここに並んでいるんで

編集・発行 nejico.

MAIL nejiaandco.kyoto@gmail.com

WEB nejiaandco.com

2020年9月25日発行

本事業は「新型コロナウイルス感染症の影響に伴う京都市文化芸術活動緊急奨励金」の採択事業です。



## neji&co. 「Sign」

振付 | 振子ぴじん (「Sign」)

振付 | 梅田哲也 (「タイトル未定」)

出演 | 大谷悠 振子ぴじん 畑中良太 御厨亮

2020年

11月20日(金) 19:00

11月21日(土) 19:00

11月22日(日) 15:00

### THEATRE EQ KYOTO

[自由席 / 日時指定 / 税込]

一般 [予約・当日] 3,000円

25歳以下 [予約・当日] 2,000円

18歳以下 [予約・当日] 無料

25歳以下チケット・18歳以下チケットの方は当日の受付にて証明できるものをご提示ください。

予約販売開始: 10月1日 チケット取扱: THEATRE E9 KYOTO 問合せ: nejiandco.kyoto@gmail.com

舞台監督: さかいまお 照明: 藤原康弘 衣装: 増田美佳 制作: 中山佐代 撮影: 渡邊寿岳 協力: Space bubu

助成: 公益財団法人全国税理士共栄会文化財団 京都府文化力チャレンジ補助事業 THEATRE E9 KYOTO スタートアップ支援事業 京都芸術センター制作支援事業

提携: THEATRE E9 KYOTO (一般社団法人アーツシード京都)

主催・企画製作: neji&co.